

## 違いを楽しむ、つながりを広げる 「ジェンダー平等への一歩」

一人一人の考え方や得意なことなどはそれぞれに違いがあります。その「違い」は、個性であり魅力です。ジェンダー平等は、そんな一人一人の個性や魅力を生かすための考え方や、個人としてお互いを認め合いながら、いろいろな人となりがること、新しい発見やアイデアなどが広がります。

ジェンダー平等を考えるきっかけとして、本市の取り組みを紹介しします。

### 男女共同参画推進実行委員会

公募により集まったメンバーで構成され、ジェンダー平等をテーマとしたイベントの企画・運営や、男女共同参画情報紙「とらいあんぐる」の記事作成・編集を行っています。



▲イベントの様子

実行委員の方に、活動の様子などお話を聞いてみました。

#### Q 参加したきっかけは？

当初は、男女共同参画を自分事として捉えていませんでしたが、職場や家庭で生かせることがあるのではないかと考え、学びの機会になればと思い参加しました。

#### Q 委員会とはどんな様子ですか？

さまざまな年代や職種の方が参加し、それぞれの視点から意見を出し合う、活気ある雰囲気です。

身近な無意識の思い込みなど事例を共有しながら、イベントの準備や「とらいあんぐる」の紙面作りに取り組んでいます。今回は、自分も相手も大切にするコミュニケーションをテーマに紙面を作成しました。

#### Q これからの目標は？

男女共同参画は、性別にとらわれず、自分らしく生き、誰もが能力を発揮できる社会をつくるために欠かせない取り組みだと実感しています。その大切さをより多くの方に伝えるため、活動を通じて発信していきたいです。



▲男女共同参画情報紙「とらいあんぐる」

来年度の募集内容について詳しくは、市ホームページをご確認ください。



▲市ホームページ

### 男女共同参画出前講座

主催者が希望するテーマに沿った講師を派遣する男女共同参画出前講座を行っています。

働きやすい職場や誰もが参加しやすい地域活動のための学びやきっかけづくりなどに活用ください。

※講師派遣費用はかかりません。  
※会場準備、資料印刷などの費用は必要です。

#### ●実施対象団体

市内事業所および自治会、学校、PTA、サークルなど(参加者10人以上)

#### ●これまでに開催した講座テーマ

- ・みんなが心地よく暮らせる地域づくり
- ・多様性を認め合うには
- ・老後を楽しむ過ごすためには
- ・職場におけるワークライフバランスについて など

#### ●参加者の声

- ・日頃から思い込みで行動したり発言したりしていることに気付いた。自分に向き合うことができ、参加して良かった。
- ・子どもとの関わり方や声掛けなどを考える良い機会となった。
- ・自分の当たり前が人とは違い、個性と捉える大切さを知った。



▲出前講座の様子

出前講座について詳しくは、市ホームページをご確認ください。

#### 申込み先

男女共同参画センター(S・S)プラザ  
せんだい  
申込方法  
電話・メール  
(02)60506  
@hitonitai  
@city.satsumasendai.jp



▲市ホームページ

## 人のとなりになろう

はしま 奈穂さん

#### 「人のとなりに」とは…

文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人となり」をイメージしたコーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当てることを目的としています。

### 恐怖から挑戦へ

「自分の言葉で、多くの人に『北朝鮮による日本人拉致問題』について考えてほしい」と思い、作文を書いたと話すのは、川内高等学校2年生の羽島奈穂さん。

拉致問題を初めて知ったのは中学1年生のとき。恐怖が勝って、自分に何ができるのか分からなかった」と当時を語る。転機は中学3年生。先生から「拉致問題に関する中学生サミット」があることを教えてもらった。

参加を目指して資料を集め、勉強したが、当日台風により参加することができなかった。しかし、その日のニュースで、拉致被害者家族の市川健一さんの特集を目にした。直接話を聞きたいと強く思った羽島さんは、知人などを通じて市川さんに会うことができた。まだまだ知らないことが多いと感じた。市川さんの話を聞いて、資料からは分からない家族の感情を知ることができた」という。その経験を作文にまとめ、中学生部門で最優秀賞を受賞。最優秀賞を受賞すると政府主催の拉致問題に関するシンポジウムで朗読する機会がもたらが、「自信がなくなり、不安が大きかった」と振り返る。

その後、「賞を取っただけで

終わりがたくな」という思いから、署名活動などの取り組みを始めた。高校1年生で再び作文コンクールに応募し、優秀賞を受賞。さらに高校2年生で三度目の応募した際には、最優秀賞を受賞した。このとき、気持ち大きく変わっていたという。「これまでの活動で自信が付き、受賞したときは『自分の言葉と感情で伝えられる』と強い気持ちだった」と語る。

#### 「絶対帰る」その思いを胸に

羽島さんが中心となって取り組んでいるのが、「鹿児島ブルーリボン」かえるの会。「今、伝えたいといけない」という思いで立ち上げ、県内の中高生10人で活動している。会の名前には、市川さん宅にあった「絶対帰る」と書かれたカエル置物に込められた願いが反映されている。

さらに令和7年の夏、「高校生による若者向け拉致問題勉強会」を開催。設立当初4人だった仲間も、勉強会などの活動を通じて増えていった。「周りの人たちの声掛けや自分の作文を朗読する機会が増えることが、拉致問題について少しでも考えたい」と話す。一方で、多くの若者が「知らない、分からない」という理由で問題に目を向けな

い現状もある。「他人事ではない。当たり前は簡単に壊れてしまう。今ある日常を送れる尊厳を考えるとほしい」と強く語る。

### 風化させない



▲勉強会での集合写真

羽島さんが、実際に拉致現場を視察して感じたのは、「本当うここで拉致されたのか」というほどの穏やかさ。「風化させないために、拉致問題について家族や大切な人と話してほしい、自分や大切な人が突然いなくなってしまう、その状況を想像してほしい。そして大切な人に出会える幸せを忘れないでほしい」と呼び掛ける。

今後も拉致問題の解決に向けて取り組みたいと語る羽島さん。「薩摩川内市の人の温かさが好き。将来も地元に残って、自分が学んだことを次の世代に伝えていきたい」とこれからの意気込みを話してくれた。